

津久井やまゆり園事件について その8

草の実会理事長 手塚 玄

事件から2年半。あの事件のその後はどうなっているのだろう。2度目の精神鑑定をするという報道があったがどうなったのか聞こえてこない。まして裁判がいつ始まるのか全くわからない。これだけの事件だから裁判を始めるためにいろいろな手続きがあるのだろうが、それでも何らかの経過の報道があってもいいと思うのは司法に無知な素人の思い込みだろうか。

また、私の周りでも、この事件についての声が聞こえてこないように感じている。2年半前、事件の直後からいろんな団体が、団体として、その代表者で、又はその職員があこの事件についての意見を表明していた。今まではめくる程度だった関係団体から届く会報、機関誌もあの事件の後からは、誰がどんなことを語っているのか、つぶさに読んでいたが、ここ最近はこの事件の記事はほとんどない。

世間では、事件の風化が語られている。でも私が今いる業界ではそんなことはないと感じている。あの事件を忘れられるはずがない。被害者が自分の知っている〇〇さんだったら、加害者が□□さんだったら…。こんな事件は二度と起こさせない、こんな人物を二度と生み出さない。忘れられないが、語る言葉が見つからない。福祉関係団体の会報などであの事件のことが取り上げられないのはこんな事なのだとは私は思っている。

でも時がこの事件を解決するはずもない、審判が下れば終わることではない。いつかは私たち自身が、この事件を語り乗り越える、思いと考えを見つけ行動に移さねばならない。だから今もインターネットなどで、この事件についての記事をあさり続けている。

NHKのホームページの「19のいのち」というサイトでとりあげ続けている。家族、福祉関係者、当事者、いろいろな立場の人が思いを表明している。創出版の月刊『創』、事件直後から何度も加害者に接見し記事を掲載し続けている。これまでの記事をまとめた『開けられたパンドラの箱』が昨年7月に発行された。犯人の考えを広めると、差し止めの動きもあったが読んでみてそんな本ではないと思う。また評論家佐藤幹夫氏が編集する『飢餓陣営』という雑誌では47号でこの事件を特集している。作家の辺見庸氏はこの事件を契機にした作品『月』を発表した。いわゆる“重症心身障害”の一人称で語られとても難解だったが、これが小説と言っているのかもしれない。疑問だけれど想像の話には思えなかった。こんな記事も見つけた、神奈川県議会議員が津久井やまゆり園の指定管理者「社会福祉法人かながわ共同会」の運営の疑問点を記した報告、またかながわ共同会元職員による「共同会」の問題点の報告。内容は省くがどれもこれも考えさせられる内容だ。ぜひ検索して読んでみてほしい。

最後に、今、切に思うことは、当事者たちの生の声。かながわ共同会の責任ある人の総括、職員の生の声、家族の本音、そしてこれからどんな暮らしを望むのか意志決定支援を丁寧にやっているという当事者がどんな生き方を選んだのかその声を、その思いを知りたい。

千葉でまた子どもが虐殺された。外国人を「殺せ」の声があふれている。凄惨な事件が次々起きるこの国で、そんな流れをくい止めることができるのは、気づいたものの役目なのだと思う。やまゆり園の体験を共有したい。だれの命にもちがいはない、のだから。

「津久井やまゆり園事件を映像化する制作集団」が『生きるのに理由はあるの?』という映画を完成させた。2月23日の職員研修時に上映する。(2月10日 記)